



今の本山小学校のプールは、昭和54年7月竣工。もうじき満46歳のプールの、最後のプール開きを行いました。プール開きでは、もう今はない、一つ前の本山小プールの思い出話をしました。

先代のプールは循環設備もなく、水を入れて2～3週間もすると、藻が生えて緑色がかってきたものでした。私が初めて25m泳ぎきったのは、その緑色プールでした。15mあたりで緑色の水を飲んでしまい、「うえっ、もうだめだ……。」と思いながらも奮起して泳ぎ切ったときの嬉しさを、水中で見た緑色の水、ゴールして振り返った緑色の景色と共によく覚えています。

そして、4日のプール開きでは、もう一つの「25m物語」が紡がれました。

もう一つの「25m物語」

1年生にとっては初めての、大きくて深いプールです。ためらいつつ、おそろおそろ足を入れる1年生を6年生が支えます。手を差し伸べて、そっと水の中へ入れてあげました。「1年生を落としてはいけない」という6年生の責任感と、「このお兄ちゃん、お姉ちゃんなら任せられる」という安心感でつながりました。

第一印象が大切なのは、水との出会いも同じです。やさしく水と出合った経験が、1年生の子どもたちと水とを、一層近いものにしてくれるでしょう。



そして、遊覧船の旅。ある子は背負われ、ある子は抱っこされ、またある子は手をつないで25mの旅路を渡りました。ゆったりと波を感じながら、波を楽しみながら。たくましい背中の中のかさを感じながら。毎年の光景ではありますが、この姿と出会うためにプール開きがあるような気さえしてきます。

渡り終えた後も、プールサイドに上がるまで6年生がお世話をします。コースロープをくぐらせてもらい、プールサイドに上がった1年生は、「もう1回泳げるん？」と満足そうでした。泳いではない1年生のこの言葉は、きっと「もう1回、おんぶして！」という要求です。

1年生と6年生のペアに続き、2年生は5年生にエスコートしてもらいました。

普段は元気な上級生も、下級生の動きにゆっくりと合わせます。水をかけられても笑顔で許します。こういった関わりを通して、上級生は寛容の心を学んでいるように思います。

プール開きの舞台裏

この日の放課後、北消防署の方を講師にお招きして、教職員が救急法の講習を受けました。心肺蘇生法やAEDの使い方を全員で確認・体験しました。

何度講習を受けても、実際に遭遇した時には動転しがちです。それでも、繰り返し練習して、少しでも自信をもって対応できるようにしなければなりません。そして、この知識と技能を身に付けた人が身の回りにたくさんいれば、さらに心強いものになります。

私たち教職員も子どもたちの安全・安心を第一に水泳指導等に取り組んでいきますが、何よりも、子どもたち自身が危険な行動を知り、自分で自分の身を守る行動をとることが大切です。自分の命を大切にすることが、「生きる力」の根幹にあることは間違いありません。

